

れき じん

# となん歴史民だより vol.12

Morioka tonan history and folklore museum

平成19年9月26日発行

発行 盛岡市都南歴史民俗資料館 盛岡市湯沢 1-1-38 TEL019-638-7228

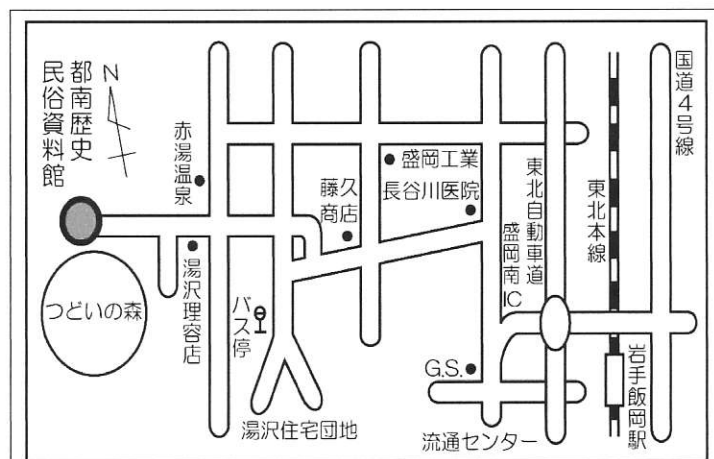


市民参加展「木のおもちゃ展」

## — もくじ —

- ・ <寄稿>手代森遺跡の異形土器に感激
- ・ 報告 史跡・文化財巡り 市民参加展
- ・ 指定文化財紹介⑫
- ・ 資料は語る⑫
- ・ となんの昔ばなし⑫

## MAP☆ACCESS



## ○利用案内

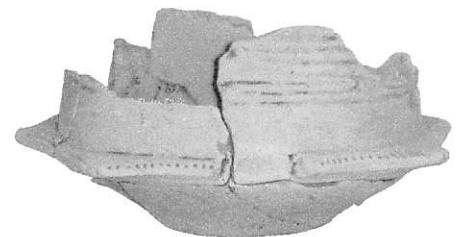
- 開館時間 午前9時から  
午後4時まで
- 入館料 無料
- 休館日 月曜日  
(休日に当たるときは、  
直近の平日)  
年末年始

今回は、山形県埋蔵文化財センターの佐藤祐輔氏から、手代森遺跡の異形土器について寄稿いただきました。

2005年7月23日、盛岡市遺跡の学び館で、第34回岩手考古学会が開催され、「岩手県における弥生前期から中期の諸問題」のテーマで多くの研究報告がなされました。研究会の中で私が最も驚いたのは、盛岡市教育委員会の津嶋さんが発表した都南歴史民俗資料館所蔵の手代森遺跡の土器の写真でした。恥ずかしい話ですが、私はそれまで旧都南村時代に発掘された資料について、その存在すら知りませんでした。是非とも実物を自分の目で確かめたい衝動にかられました。

私の念願がかなったのは、翌年の6月17日でした。青森県むつ市で行っている発掘調査に行く途中に、都南歴史民俗資料館を訪ねて、手代森遺跡の土器を間近で見ることができました。手代森遺跡からは国の重要文化財に指定されている遮光器土偶も出土していますが、私の目を釘付けにしたのは「大洞A'式の異形土器」でした。食い入るように見詰めている私の姿が不思議だったのでしょうか。館長さんが声をかけてくれて、「実は・・・」とお話すると、ケースの鍵をあけてくれました。ずっと気になっていた土器を、思いもかけず手にとって観察することができ、望外の喜びでした。

手代森遺跡の土器が、どうして私をここまで虜にしてしまうかと言いますと、理由は二つあります。一つ目の理由は、縄文時代晩期最終末期（大洞A'式）の資料としては、他の遺跡の資料と比べてとても良好な状態で残っていることです。この時期の資料は、縄文時代から弥生時代へ移り変わる大変重要な時期でありながら、東北全体でも数えるほどの遺跡しか見つかっていません。そんな貴重な資料が、手代森遺跡では良好な状態でたくさん出土しているのです。手代森遺跡は、私にとってわくわくするような遺跡です。



大洞A'式の異形土器



大洞A'式の台付浅鉢

二つ目の理由は、異形土器が出土していることです。突起が異常に発達したものや、変わった位置に突起があるものなど、これまでの考えでは理解できないような土器が出土しています。手代森遺跡は、特別な性格をもった遺跡であると考えても良いのではないのでしょうか。

手代森遺跡は、非常に重要な遺跡だと私は考えます。そして、今後、縄文・弥生時代の研究に大きく貢献してくれるでしょう。手代森遺跡の資料を手がかりに、私自身もその一役を担いたいと思っています。

# 報告

6月27日

史跡・文化財巡り「歴史の街道散歩」  
～盛岡ゆかりの歴史のみち・花巻～

今年度の第1回目の史跡・文化財巡りは、花巻市内で行いました。当日は絶好の日和に恵まれ、普段訪れる機会の少ない寺院や施設をまわり、とても有意義な史跡・文化財巡りになりました。



花巻城跡

7月18日～8月28日

市民参加展「木のおもちゃ展」

当館では、昨年度から、市民参加展として市民の皆様のコレクションや研究を紹介しています。

「木のおもちゃ展」は、4月の「北東北のこけし展」に続く今年度の第2弾の企画で鎌田 隆さん（盛岡市天神町）のコレクションを紹介しました。

明治以後のおもちゃの主な素材は、セルロイド、ゴム、プラスチックと変化してきましたが、最近、幼児用を中心に木のおもちゃの温もりや優しさが見直されています。

今回の展示会では、昭和期の木製玩具を中心に390点以上を紹介しました。展示だけでなく子どもが実際に遊べるコーナーも設けたため、親子で遊びに来る見学者が多数訪れ、大盛況でした。

## 盛岡市所在指定文化財紹介 ⑫

### 市指定 有形文化財（彫刻） **もくどうあみだによらいつどう 木造阿彌陀如来立像**

昭和45年（1970）2月25日指定 盛岡市名須川町 吉祥寺



この阿彌陀如来立像は、盛岡市名須川町にある吉祥寺（きちじょうじ）の本尊です。

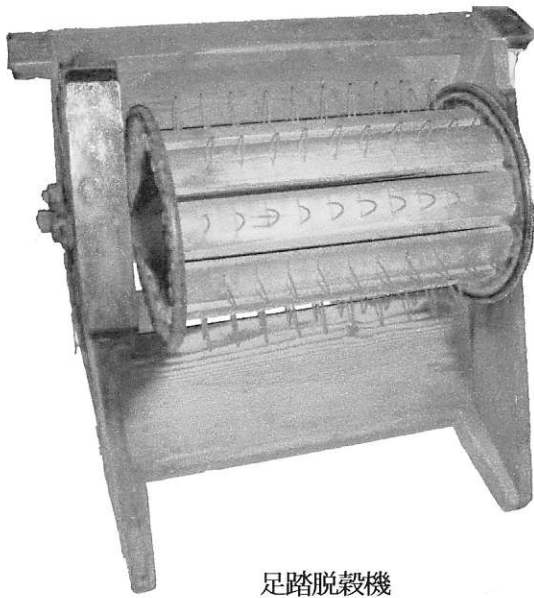
総高172cmの秀作で保存もよく、手は上品下生（じょうぼんげしょう）の安曇印（あんいん）をむすび、左右に観音・勢至（せいし）の二菩薩（ぼさつ）を従えています。木彫の寄木造りで、目は玉眼で瞳に赤い色で輪が描かれていて、伏眼となっています。これは宋風（そうふう）を模したものとされています。あどけない相好は親しみを覚えます。また特色として、僅かに口を開いて上唇のかげから白い歯をのぞかせていて、歯は螺鈿貝（らでんがい）を細工してはめこんだものです。

それでこの本尊は、むかしから「歯生いの弥陀（はおいのみだ）」として信仰されており、このような歯生いの阿彌陀像の作例は極めて珍しく、吉祥寺の立像を加えて全国に4体のみであるといわれています。

#### 参考資料

盛岡市教育委員会 「盛岡の文化財」 1997

法量 像高97.0cm 肘張30.0cm  
肩巾23.0cm 裾張21.0cm



足踏脱穀機

この農機具（写真左）の名前は足踏脱穀機といい、脱穀を行う道具です。足踏によって胴部を回転させ、とりつけられた金具に稲穂をあてて脱穀します。大正時代から昭和20年代まで使用されていました。それ以前は、脱穀に千歯扱き（せんばこき）が使用されていて（写真下）、少しずつ農機具が進歩しているのが分かります。

農機具が大きく進歩したのは昭和に入ってからです。それは、戦争によって農村が深刻な人手不足の時代を迎え、少人数でも農作業ができるように農機具の機械化が進められたためです。

脱穀用機具も昭和20年代以降、動力脱穀機、自動脱穀機が開発され、近代化が進んでいきます。



千歯扱き

## 参考・引用資料

田原虎次「稲作における農機具の変遷」 農林水産技術会議事務局 1990

## とんの昔ばなし⑫

## 『安珍と清姫（あんちんときよひめ）』

西見前柿木に感通庵という寺がありました。

宝永三年（一七〇六）開山し、享保二〇年（一七三五）廢庵となりました。御本尊は如意輪観音でしたが、今どうなったか不明です。月山の宮というものもありましたが、地域の人たちは八月八日を祭日として祀っており、碑石も存在しています。

その庵に安珍という修験僧がいました。ある時、雫石の安庭に行き、ある豪家に泊まりました。その家には清という田舎には珍しいほどのうわしい娘がいました。安珍はひと目見てその娘の美貌に心をうばわれ、ついに相愛の仲になってしまいました。

安珍は僧形の身、世間の噂を恐れて、ひそかに庵を出て遁れさってしまいました。清はやるせない思いで安珍の後をおいかけ、渡船場まで来ましたが、その姿を見ることができませんでした。清は安珍の薄情をいたく怨み怨んで付近の沼に身を投じてしまいました。

安珍はそれとはつゆ知らず、旅に旅を重ねて近江の三井寺から根来寺に行こうとし、その途中道成寺で一泊しました。その夜、清の死霊があらわれ、安珍はさんざん悩まされて、ついに狂死してしまつたそうです。（終）